資源のリサイクル

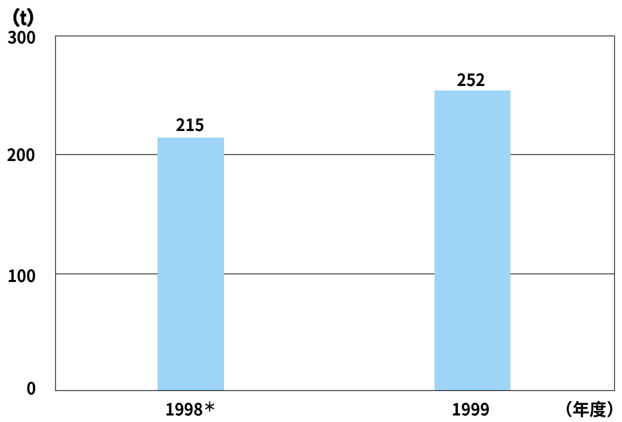
循環型社会の実現、これは、不使用物品を2次利用、3次利用する仕組みを作るとともに、再利用できなくなったもの（廃棄物）をいかに再資源化するかにかかっています。しかし、廃棄物の再資源化の方法は廃棄物の種類によって様々であり、技術面でも、制度面でも多くの課題が存在します。ここでは、当社の事業活動において、こうした課題を克服し、実績を上げてきた主な取り組みについて報告します。

撤去通信設備のリサイクル

撤去した通信設備などの再利用（Reuse：リユース）、再生利用（Recycle：リサイクル）に努め、廃棄量の削減（Reduction：リダクション）に取り組んでいます。

●リユース・リサイクルの推進

リユースに関しては、撤去した通信ケーブルや電柱、公衆電話機などで再利用可能な物品を社内LANに登録し、全社的に情報の共有化を図り、必要な事業所で利用しています。リサイクルに関しては、通信ケーブルや通信設備に使用されている銅、鉄、貴金属の回収・再生、コンクリート電柱から道路の路盤材料へ、木電柱からチップ利用へ、バッテリーから再生バッテリーへとリサイクルを推進しています。



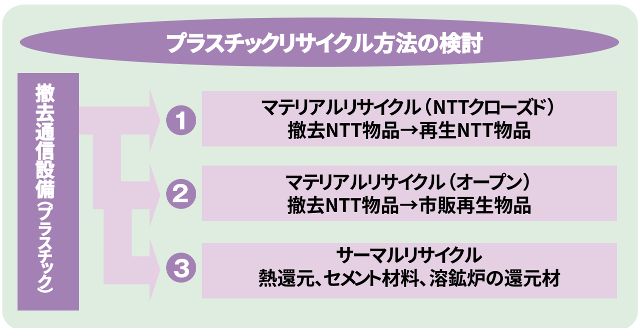
マテリアルリサイクル再生品化（リペレット）量

*1998年度については、旧NTTのデータからNTT西日本分データのみを抜粋した数値

●プラスチックリサイクルの推進

プラスチック類のリサイクル推進は、廃棄量削減のキーポイントでもあることから、「できることから実施する」という方針で取り組んでいます。

リサイクルの検討にあたっては下図の順序で検討することとしています。



プラスチックリサイクル方法の検討順序

マテリアルリサイクル（NTTクローズド：NTT内）の事例はケーブル接続端子函カバー（材質：ポリプロピレン等）や電柱支線ガード（材質：ポリエチレン）などです。

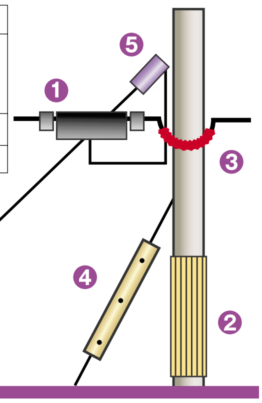
電柱支線ガードについては、リサイクルの効率化を図るため、リサイクルマークをこれまでのシール方式からプラスチック一体化成形に変更し、分別・解体時における作業を簡素化しました。

このような取り組みによって、再生品化量（リペレット）の1999年度実績は、252tに達しました。

マテリアルリサイクル（オープン：NTT外）については、市中およびリサイクル事業者の調査を実施し、リサイクル市場の開拓を行うことにより、リサイクルを推進しています。

サーマルリサイクルは、撤去したプラスチックを焼却処分する過程で発生する熱を給湯等へ利用することにより、自然資源の枯渇抑止を図っています。なお、1999年度は、146tの光ケーブルについてサーマルリサイクルを実施しました。

撤去品	リサイクル品
接続端子函 →	接続端子函ー① 電柱標識板ー② スパイラルスリーブー③
電柱支線ガード →	電柱支線ガードー④
黒電話機 →	屋外線留め具ー⑤



プラスチックのマテリアルリサイクル事例

●グリーン調達によるリサイクル推進

今後は使用材料の統一、リサイクルの容易な材料の選定、有害物の抑制、易解体設計など物品調達時にリサイクル性の高いものを調達するグリーン調達の実施によって、より一層リサイクルの推進に取り組みます。

ニカド電池の回収

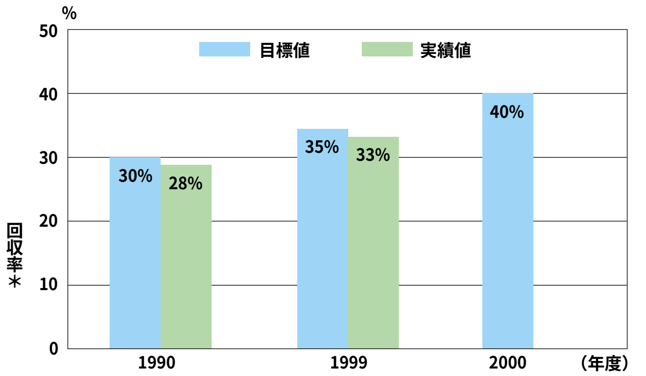
NTTのコードレスホンに使用しているニカド電池は、数百回もの充電・放電を繰り返すことができる高性能で経済的な電池ですが、ニカド電池にも寿命があります。このとき使用済みのニカド電池をゴミとして捨てないで回収すれば貴重な資源であるニッケルとカドミウムをリサイクルできます。

1993年6月にニカド電池がリサイクル法の対象に指定されたため、ニカド電池を取り出しやすいように設計し、電池本体にも再生資源として利用することを目的として、分別回収をするための認識用マークを表示することになりました。

資源の有効利用に寄与する観点から、次の3つの取り組みを実施し、ニカド電池のリサイクルを推進しています。

- 取扱説明書と電池パック本体へのリサイクル推進のお願い文の掲載
- 営業窓口などへのニカド電池リサイクルBOXの設置
- 使用済み電池パックのリサイクル事業者への送付

営業窓口などで回収したニカド電池パックの回収率は、1998年度で28%、1999年度では33%となっており、今後も更なるリサイクルの推進に取り組んでいきます。



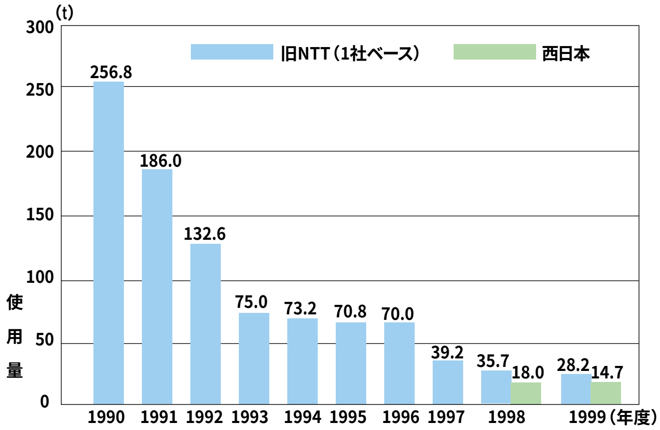
ニカド電池回収率

＊回収率：直近３ヶ年の平均販売量に対する当該年度の回収量の比

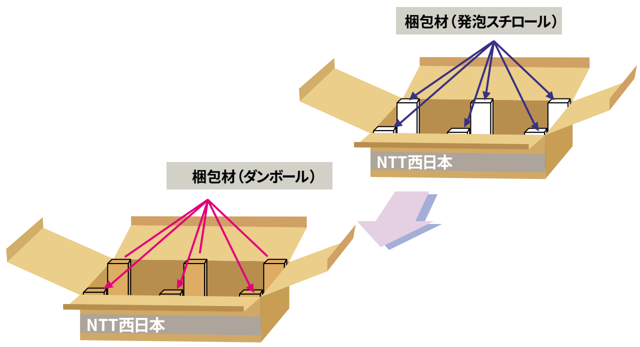
また、ニカド電池の種類抑制を図るため、一つの電池パックを幾種ものコードレスホンで使用できるよう共用化もすすめています。

通信機器商品の梱包･包装材の改善

旧NTTでは、1990年度に通信機器商品の梱包材として年間257tもの発泡スチロールを使用していました。



発泡スチロール使用量



発泡スチロール使用量低減に向けた取り組み―使用材料の変更―

発泡スチロールは、衝撃や水分、湿気等から商品を保護する優れた包装特性を持った素材である反面、自然環境下においては分解されにくいという特性をも持ち合わせています。

コードレス電話機や、家庭用ファクシミリ等の商品で使用される梱包材については、一般家庭からゴミとして排出される可能性が高いため、1990年から発泡スチロールより環境負荷の低い段ボールに順次切り替えを行ってきました。

事業所用ファクシミリや構内交換装置などの重量物や精密機器で段ボールでは十分な梱包材となり得ない場合であっても、発泡スチロールの肉薄化を図るなど、使用量の削減に取り組んでいます。その結果、1999年度にはNTT西日本およびNTT東日本の合計で28t（1990年度使用量の約1/9）まで削減することができました。今後はパソコン関連商品の需要増加に伴い、精密機器の購入数の増加が予想されますが、発泡スチロール使用量の削減に向けた取り組みを継続していきます。

また、容器包装リサイクル法の完全施行に伴い、当社では提供商品の容器包装としての排出量の管理を行っており、再商品化を代行する指定法人との契約によって、排出量に基づくリサイクル義務を履行しています。